

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：33706

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24659974

研究課題名(和文)在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理教育の展開と組織化に関する研究

研究課題名(英文)Deployment and Systematization of Nursing Ethics Education for Visiting Nurses Providing Home-based End-of-Life Care

研究代表者

平山 恵美子 (HIRAYAMA, Emiko)

中京学院大学・看護学部・教授

研究者番号：00389983

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、在宅終末期ケアの質の向上をめざし、現場に即した訪問看護師の看護倫理教育の展開と組織化を本格的に行ったものである。具体的目的は、1.「パイロット版：在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理の質の向上を図る教育プログラム」を完成させ、2.完成した教育プログラムを展開できる人材養成プログラムを開発し、評価を行うことである。結果：完成した教育プログラムは、“あらねばならないケア”から自然な心の動きから成されるケアへと移行を促し、開発した人材養成プログラムは、看護行為を支える思いや感情などを捉える能力の向上やファシリテーターとして相手を慮り、支える力の育みに寄与することが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In the present study, we fully deployed and systematized nursing ethics education programs adapted to visiting nurses providing home-based care, in order to improve quality of home-based end-of-life care. Specifically, the deployed programs involved (1) completion of “training programs for visiting nurses providing home-based end-of-life care, in order to improve quality of nursing ethics,” and (2) development and evaluation of programs that train staff to deploy the training programs. Results: it was found that (1) our training programs encourage a shift from “rule-and-norm-based care” to “care stemming from natural shifts in emotion,” and that (2) our staff training programs a) improve nurses’ ability to grasp emotions or sentiments motivating nursing actions, and b) improve nurses’ ability to provide support, while considering nurses as facilitators.

研究分野：医歯薬学

キーワード：終末期ケア 訪問看護師 看護倫理 看護師教育 在宅看護 M-GTA

1. 研究開始当初の背景

在宅における終末期にある人への看護では、限定された生命予後の先立ちにより“やり直しのきかなさ”が存在していることや、療養者本人のみでなく療養者の死と向き合っている家族に対しても支援が必要とされるため、訪問看護師の臨床判断¹⁾を支える倫理的感受性は、在宅終末期看護の質に大きく影響を及ぼす。

これまで、訪問看護における倫理に関する研究は、意思決定支援や訪問看護師が直面する様々なジレンマ等が多く報告されている²⁻⁴⁾。しかし、国内で研究者ら以外、訪問看護師自身の倫理観に焦点を当てた研究はほとんど見られない。研究者らはすでに、在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理に関する研究に取り組んできた。

(1) 平成 21 年度...在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理観の実態の分析を行った。結果：訪問看護師は、利用者の尊重や自律の支援は言葉としては理解していても、自らの看護実践の何がそのことと関係しているのかという見地が希薄していることが認められた。また、これらは、所属している訪問看護ステーションによって差異がみられた⁵⁾。

(2) 平成 22 年度...前述の研究結果から、研究者らは、在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理の質の向上を図る教育プログラムの開発に着手した^{6,7)}。具体的には、協力の得られた 2 施設 10 名の訪問看護師に、自己の看護実践の内省や倫理的観点から集合教育および個人ワークを提供し、看護倫理観の向上に繋がるよう研究者らがファシリテートを行った。M-GTA を用いた評価の結果：1. 真に相手を尊重し、慮るケアリング倫理の向上に寄与する、2. 事例を丁寧に振り返り内省するプロセスは、看護実践に内包されていた看護倫理の意味の発見へと向かう手助けとなる等の Merit がみられた。しかし、一方、

Demerit として 1. 訪問看護師の離しがたいビリーフ(経験を通して得た善きことの価値判断で判断する)を超える新たな倫理的発見には至らない、2. 判断の拠り所として倫理理論が活用されていない、3. 教育プログラムの展開にはファシリテーターが不可欠であることが明らかとなった⁸⁾。

「開発版：在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理の質の向上を図る教育プログラム(以後、開発版：教育プログラム)」の評価結果を踏まえ、看護実践をケアリング・倫理理論の両面から包括的にバランスよく捉えられ訪問看護師の倫理観の発展が図れるような教育プログラムの完成、およびこの教育プログラムを展開できる倫理学の知識を持ち看護実践に埋め込まれた深い意味の解釈ができるファシリテーター人材養成プログラムの開発が必要であることが示唆された。

2. 研究の目的

(1) 「開発版：教育プログラム」の内容・構築を再検討し、「在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理の質の向上を図る教育プログラム(以下、教育プログラム)」を完成する。

(2) 「教育プログラム」をファシリテートできる「人材養成プログラム」を開発し、評価する。

3. 研究の方法

(1) 「教育プログラム」の完成・実施・評価 修正した「教育プログラム」の概要

研究者らが開発した「開発版：教育プログラム」は、真に相手を尊重し慮るケアリング倫理の向上に寄与する反面、正義に基づく倫理理論の観点からの捉えが弱いため、包括的でバランスの良い看護倫理観を備えることができるよう教育プログラムの修正を行った。修正した教育プログラムは 2 回の集合教育と 3 回の個人ワークで構築した。表 1、図

1に示す。

研究デザイン
介入および質的帰納的記述研究

研究協力者

訪問看護ステーション（4か所）に勤務し、在宅終末期看護に携わった経験のある訪問看護師14名とし、在宅終末期ケアの度合いは限定しなかった。

表 1

『在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理の質の向上を図る教育プログラム』	
	研究協力者：事前に看護実践記入用紙に倫理的観点から印象深い自己の看護実践を記述する。
1回目個人ワーク	研究協力者：看護実践記入用紙に倫理的観点から印象深い自己の看護実践を記述する。 研究者：どのような倫理的な良さや課題が内在しているのか研究協力者が気づけるように助言する。 （看護実践が浮かび上がるようにコメントする）
1回目集合教育	講義にて看護倫理原則とケアリングについて知識を得る。次に、コメントを基に修正した看護実践記入用紙を基に看護実践の深まりと広がりを狙いグループで語り聞きあう。 （看護実践が浮かび上がるように聞く）
2回目個人ワーク	研究協力者：1回目集合教育の講義グループでの語り合いを参考にして、自己の看護実践を振り返る。 研究者：研究協力者が振り返りのプロセスをとおして倫理観に基づいた看護を実践することの意味を発見できるよう から に関してより詳しい助言を行う。 （倫理的観点からコメントする） ・研究協力者は、研究者らの助言を参考に2回目集合教育前までに からの観点からケースを振り返り修正する。
2回目集合教育	研究協力者：各自の看護実践の振り返りを発表する。他の研究協力者の発表を聞き語り合うことにより自己との共通点と相違点について内省する。 研究者： （倫理的観点からコメントする）
3回目個人ワーク	研究協力者：2回の個人ワークおよび集合教育をとおしては倫理観に基づいた看護を実践することの意味の発見へと向かう。



図 1 『在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理の質の向上を図る教育プログラム』

データ収集

研究協力者の教育プログラム前（1回目個人ワーク）および教育プログラム後（3回目個人ワーク）の看護実践記入用紙の記述内容を生データとした。

分析方法

分析は M-GTA (Modified Grounded Theory

Approach) に沿って行った^{9,10)}。

(2) 「教育プログラム」をファシリテートできる「人材養成プログラム」の開発・評価

人材養成プログラムの概要

本プログラムは、研究者らが現象学的方法論に基づき開発した¹¹⁻¹³⁾。プログラム前半：研究協力者は、ファシリテートの訓練のための事例に対して看護実践が顕わになるようにコメントを入れ、プログラム後半：研究協力者は、倫理原則とケアリングの視点から4分割表を用いて倫理的問題を同定し、事例提供者が自己の看護実践に内在している看護倫理問題について自ら気づくことができるようにコメントを完成させる。研究者は、研究協力者の事例提供者への関わりそのものにスーパーバイズを行うのではなく、研究協力者自身の力量をあげるためのスーパーバイズを行う。このようなスーパーバイズの関わり方が本「人材養成プログラム」の特徴である。（表2、図2参照）

表 2

『在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理の質の向上を図る教育プログラム』をファシリテートできる「人材養成プログラム」	
集合教育前	研究協力者は、「ファシリテートの訓練のための事例」を精読し、在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の倫理観の向上に焦点を当て、事例提供者に対してどのようなファシリテートが必要だと考えるかを記述する。 「ファシリテートの訓練のための事例」に対して、 の観点から具体的に事例提供者にコメントを入れる（理由も含む）、 を集合教育 時に持参する。
集合教育 ...2時間	1) 看護倫理の各論講義・演習（ジョンセンの4分割表を用いて倫理的検討を実施）...1時間 2) 現象学的面接法...50分 ・説明10分後、ロールプレイ...きき手、話し手を体験、各3分間体験する テーマ：最近楽しかったことや嬉しかったこと 3) ファシリテート訓練のための看護倫理演習個人ワークの留意点...10分
第1回看護倫理演習個人ワーク	研究協力者：、「ファシリテートの訓練のための事例」に対して、コメントを入れ、提出する。 研究者：研究協力者が出したコメントに対してスーパーバイズを行う。
第2回看護倫理演習個人ワーク	研究協力者：研究者から指摘された内容について修正を行う。 研究者：研究協力者によってコメントされた事例を修正（修正版：事例）し研究協力者に提示する。
第3回看護倫理演習個人ワーク	研究協力者：提示された修正版：事例についてコメントを完成させる。 研究者は：研究協力者が完成させたコメントに対して、スーパーバイズを行う。
集合教育	● 個人ワークの発表 ・「第一段階：教育プログラム」への参加を通して、在宅終末期ケアに携わる訪問看護師として自らの看護実践における倫理的課題をどのように気づいていったのか ・「第二段階：教育プログラム」への参加を通して、在宅終末期ケアに携わる訪問看護師として、倫理的課題について自ら気づき、発見し、行動できる専門家を育成していくためにはどのようなファシリテートのありかたが望ましいか

研究デザイン

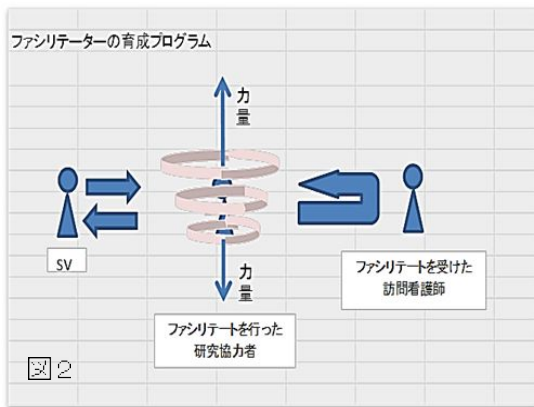
介入および質的帰納的記述研究

研究協力者

「教育プログラム」に参加し、ファシリテーター「人材養成プログラム」への協力が得られた訪問看護師7名(3施設)。

分析方法

ファシリテーター「人材養成プログラム」を研究協力者に提供し、教育前後の事例提供者へのコメント内容およびレポート内容を基に研究協力者(ファシリテーター)が、在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理の質の向上を促進出来たか、M-GTAを用いて分析した。



(3) 倫理的配慮

研究の趣旨、目的、方法、研究結果の公表や倫理的配慮について口頭と文書で説明し同意を得た。倫理的配慮として、自発的参加、研究協力の自由、プライバシーの保護などを保障した。本研究は、中京学院大学看護学部倫理審査会の承認を得て行われた。

4. 研究成果

(1) 「教育プログラム」の完成・実施・評価

研究協力者の年齢は、20歳代後半～50歳代後半で、看護経験年数は7年～31年(平均 20.3 ± 6.9 年)、訪問看護経験年数は6ヶ月～16年(平均 5.7 ± 4.4 年)であった。M-GTAで生成された概念の一覧を表3に、結果図を図3に示す。結果図の《 》はテーマである。コア概念は【_】、概念は【 】で示す。

表3

在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の倫理観

教育前:概念	教育後:概念
家族が肯定的に感じられる看取りの支援	療養者や家族への臆病なケア
療養者、家族が安楽に過ごせるケア	あなたの側にいる
医師との見解の相違があった時は利用者を擁護	共に感ずることから生まれる安楽なケア
自己決定尊重の裏側にある隠微な責任転嫁	無意識に行っていた倫理に合ったケア
援助を求める人は見過ごせない	どんな時でも療養者の思いに応えることが第一義
療養者、家族、医療者の一致団結が重要	肯定的に関わることで報われる家族の努力や苦勞
死に向き合うことができる療養者・家族	自然な心の動きから成されるケア

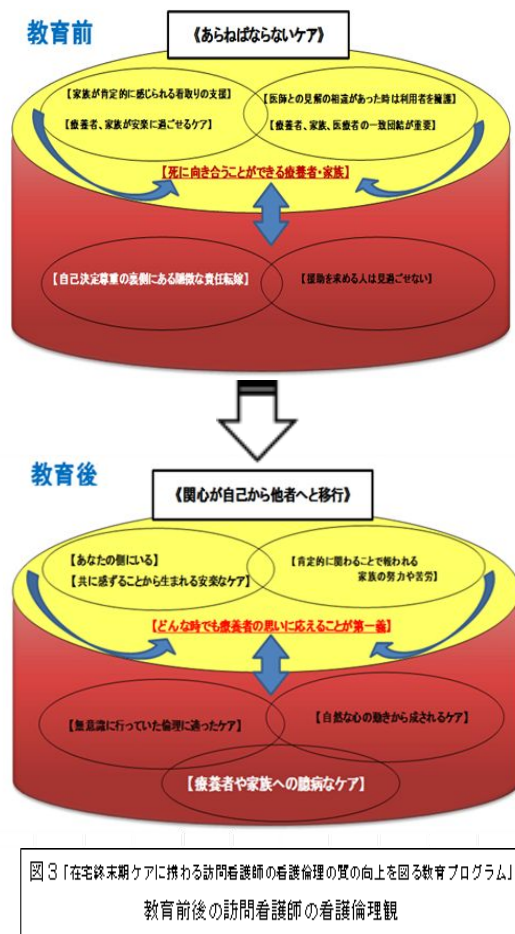


図3 「在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理の質の向上を図る教育プログラム」
教育前後の訪問看護師の看護倫理観

「教育プログラム」教育前、研究協力者は背景に隠微な責任転嫁を持ちながら、「倫理

的なるものとされる行為”に焦点を当てていたが、教育後は、利用者に専心没頭する中で関心が自己から利用者へと移行し、自ずから利用者の安寧を促進したいという“自然なるケア(Natural caring)”へと変化していた。主な変化として、ケアにおける《関心が自己から他者へと移行》する、《あらねばならないケア》から【自然な心の動きから成されるケア】へと移行する、【自己決定尊重の裏側にある隠微な責任転嫁】から【どんな時でも療養者の思いに応えることが第一義】等が挙げられた。

(2)「教育プログラム」をファシリテートできる「人材養成プログラム」の開発・評価

人材養成プログラムの研究協力者の年齢は、20歳代後半～50歳代後半で、看護経験年数は7年～29年(平均19.1±6.4年)、訪問看護経験年数は6ヶ月～16年(平均6.5±5.4年)であった。M-GTAで分析した結果、生成された概念の一覧を表4に示す。

表4

<「人材養成プログラム」教育前後のファシリテートに関連する概念の一覧>

教育前	教育後
問題解決に向けた分析的理解を促す	他者の考えや倫理観を理解するためには、分析的理解よりも情緒的理解の方が重要である
看護師としての感情や直観を専門的な価値としてみなすことを否む	他者の意向をくみ取れる実践能力および指導能力を備えた人材育成が必要である
看護実践の特性や状況の理解よりも結果が大事と分らせる	共にわかりあう姿勢が大切である
何よりも療養者本人・家族の意思を言動から確かめることにこだわる	療養者・家族の視点から看護を省みることが看護の拠り所となる
自分の信念は利用者にとっても善きことなので同じようにすることを求める(自己の価値観の押し付け)	自己のドリーフ(信念・価値観)から自由になることで看護実践の本質や倫理の意味がみえる
自身の信念に基づき「看護師のあべき姿」を説き勧める	自ら気づくことが出来るよう指導することが重要である
	ファシリテートは相手に心を配り、支えることの上に成り立つ

「教育プログラム」をファシリテートできる「人材養成プログラム」実施前、研究協力者は、【問題解決に向けた分析的理解を促す】、【看護師としての感情や直観を専門的な価値としてみなすことを否む】など問題解決的・分析的アドバイスに重きが置かれていた。また、【療養者本人・家族の意思を言動から確かめることにこだわる】も特徴的な概念として抽出された。実施後は【他者の考えや倫理観を理解するためには、分析的理解よりも情緒的理解の方が重要である】、【他者の意向をくみ取れる実践能力および指導能力を備えた人材育成の必要性を実感する】が特徴的な概念として抽出された。

現時点でのまとめ

正義の倫理とケアリングをバランスよく保ちながら、専心没頭と動機の置き換えに特徴づけられる本「教育プログラム」を在宅終末期ケアに携わる訪問看護師に推進していくことは、在宅で終末期を過ごす利用者のQOLの向上強いては在宅終末期ケアの発展に向け重要であることが明らかとなった。

また、本「教育プログラム」をファシリテートできる「人材養成プログラム」は、看護行為を支える思いや感情など表面に表れにくい特性を敏感に注意深く捉える能力の向上やファシリテーターとして相手を慮り、支える力を育むことに寄与することが明らかとなった。限りある生を在宅で生きる療養者本人・家族へのケアに携わる訪問看護師が一人一人に合ったよい看護を提供していくためには、単に倫理原則に当てはめるような倫理の活用では通用しない。自らも巻き込まれながら看護実践の本質を顕わにしていくプロセスの中で、看護の倫理観が向上していくものと考えられる。

今後は、本「教育プログラム」の推進とファシリテーター「人材養成プログラム」の洗練、実施・評価を重ね、在宅終末期ケアに携

わる訪問看護師の看護倫理教育のより良い展開と組織化をさらに模索していきたい。

<引用文献>

- Sheila A Corcoran、看護における Clinical Judgment の基本概念、看護研究 23(4)、1990、351-360
- 園田芳美、石垣和子、明確な意思表示のできない終末期高齢者と家族のターミナルケアにおける意思表示に関する訪問看護支援、老年看護学、13(2)、2009、72-79
- 馬庭恭子、終末期の在宅ケアにおける看護倫理、ターミナルケア、9(2)、1990、110-112
- 習田明裕、川村佐和子、志自岐康子他、訪問看護における倫理的課題、東京保健科学学会誌、5(3)、2002、144 - 151
- 平山恵美子、上條育代、岩月すみ江、在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理観、日本医学看護学教育学会誌、24(1)、2015、56 - 62
- 陣田泰子、看護現場学への招待、医学書院、2007、121 - 122
- ベナーP、ベナー看護論新訳版、医学書院、2005、257 - 259
- 平山恵美子、上條育代、岩月すみ江、在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の看護倫理教育の試み、地域ケアリング、17(6)、2015、77 - 83
- 木下康仁、グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践、弘文堂、2003、225 - 248
- 平山恵美子、上條育代、岩月すみ江他、M-GTA を用いての質的研究の可能性-分析結果図作成のプロセスに焦点をあてて-、飯田女子短期大学紀要、2008、25、77 - 84
- 和泉成子、ターミナルケアにおける看護師の倫理的関心 現象学的アプローチを用いた探求、日本看護科学会誌 27(4)、2007、72-80.
- 渡邊美千代、渡邊智子、高橋照子、看護における現象学の活用とその動向、看護研究、37(5)、2004、59 - 69
- 鷲田清一、看護と哲学をつなぐもの、看護研究、37(5)、2004、37 - 48

5 . 主な発表論文等

[学会発表](計 2 件)

- Emiko Hirayama、An assessment of an education program designed to improve the ethics of visiting nurses engaged in end-of-life care :An analysis of nursing practice descriptions before and after the education program、Asian American Pacific Islander Nurses Association 's 12th Annual Conference、2015年3月27日~28日 ラスベガス(米国)
- 平山恵美子、「在宅終末期ケアに携わる訪問看護師の倫理観の向上を図る教育プログラム」におけるファシリテーター人材養成プログラムの開発、第25回日本医学看護学教育学会学術学会、2015年3月14日、島根県出雲市

6 . 研究組織

(1)研究代表者

平山 恵美子 (HIRAYAMA, Emiko)
中京学院大学・看護学部・教授
研究者番号： 00389983

(2)研究分担者

金谷 光子 (KANAYA, Mitsuko)
新潟医療福祉大学・健康科学部・教授
研究者番号： 80300135